



遠山を齎きてよりの鍬始  
 節分会跳ねて踏ん切りつきにけり  
 日脚伸ぶ扇廻しを日に五分  
 寒の内グリーフケアをまん中に  
 待春や混み合つてゐる窓の色  
 無心とは雪搔くことよけふの空  
 寒満月光に翅音あるやうな  
 薄氷は岬の形鳥降り来  
 モットーは意地悪ばあば大噓  
 だんごむしの家族描きて春を待つ  
 初恋は雪のほひのやうなもの  
 寒鰯のかまを刮げてより無言  
 軍港に汽笛溢るる去年今年  
 \*  
 地核への入口のやう炭焼竈  
 石牟礼道子忌眩灯のまつしぐら  
 奥山源丘  
 堤保徳  
 大野今朝子  
 有手勉  
 黒沢孝子  
 久保美智子  
 野口美智子  
 篠遠良子  
 依田ひろ  
 宮坂やよい  
 辰野利彦  
 太田薫  
 宮沢久子  
 神林利一  
 宮岡光子

めつけ物雪に転びて見る虚空  
 老いるとは燠から灰の崩るごと  
 晩鳥の土の匂ひを抱いて飛ぶ  
 いずれ吾を忘るる母よ風花す  
 句を学び句を支へとし去年今年  
 焼きたてのパン大年の軽井沢  
 春の雪續粉妻の声いづこ  
 男根も雛も奉られ針供養  
 一切の終る或る日や軒に干葉  
 鍼を打つ頭のひやく会え朝霞  
 吊し雛亡き児戯れるるやうな  
 雪田植宿老の振り嬰鏢と  
 風捌くやうな商ひ二月尽  
 落葉焚き壊れさうなる吾を放つ  
 機関車は白息を吐く車庫深夜  
 米山節子  
 倉科繁登  
 安藤潤子  
 菊池理津子  
 青木百合子  
 北沢雅子  
 満田光生  
 瀬戸正男  
 酒井和子  
 長島環  
 千葉任子  
 山田一政  
 牧野繭  
 田村道子  
 土屋敏弘

巻頭言 東京の雪に驚いた。前夜に会議があり水道橋のホテルに泊まった。折から東京ドームは大谷、佐々木、山本らのカブスードジャース開幕の野球試合があり、天の神様も驚いたのか、翌朝は、ぼたぼたと牡丹雪。三月は天上、地上ともに忙しい。忙しさを味方につけ、いかに俳句を作るか、要は気づいたことをメモにとることである。小さいことでもいい、瞬間に気づくことは時間が経つと実に新鮮だ。偶然とか瞬間とかを言葉の切り口に、その積み上げにより連想が豊かに展開する。三月は言葉をつまみ、俳句の基本をしっかり確認する月である。新たな四月が始まる。

戦後八十年という。そのうち四十三年間が昭和、平成は三十年。令和が七年目に入る。私の記憶では民衆が元気で、時代が生きていたのが一九六〇（昭和三十五）年、安保条約改定反対で世情が声に満ち溢れた時、政治の季節。その後所得倍増を叫び、政治家がお金の時代を演出する、経済の時代。同時に高齢社会を迎え、すっかり婆さんの発言が目目され出す時代。これは政治の時代、経済の時代ほど明快ではないが、「しっかり婆さん」の時代が高齢社会と共に、意外に今でも続いているのではないか。

意地悪はあばとはいかなる婆さんか―その知恵を知りたい

モットーは意地悪ばあば大噓 依田 ひろ

「意地悪ばあば」である。「意地悪ばあば」ではない。差別用語ではなく、婆の知恵こそ大事と、進んでわが想いを発言

糸糸の糸巻の綯に様々な色が巻かれている。自然な糸の色から春が来る勇気を与えられたという。地味な句柄だけに微妙な深い気持が込められている。

無心とは雪掻くことよけふの空 久保美智子

富山の雪は日本海沿岸でその水分を含んだ重さが独特との話を聞いた。ひたすらに、無心にならざるを得ない。雪掻は恨みようがない。試練である。悟りの無心を思わせる。井波の真宗大谷派瑞泉寺門前町に住む作者らしい機転の表現だ。

寒満月光に翅音あるやうな 野口美智子

寒い最中の満月の光に翅音を聞いた発想が清新である。現象ではなく、精神性を感じさせ、心の豊かさを思わせる。

薄氷は岬の形鳥降り来 篠遠 良子

湖に出来た薄氷が沖を目ざして伸びてゆくさまか。大胆な発想ではないが、薄氷と鳥の飛来に、堅実に描写力を養っている熱意が感じられる。

今月の秀句

日脚伸ぶ扇廻しを日に五分 大野今朝子

踊りのお師匠さん。扇を手首で回す。それくらいとは言えない芸に驚いた。扇が山川草木の表情を表す。それは熟練によりスピード感が重要なことに気づかされるのである。毎日五分間の練習が新しい宇宙を描き出す。芸とは気づき。

する婆さんだ。聞いて身に刺さるような直言をはばからない婆さん。意地悪こそ魅力。若者発言はそれにより磨かれる。佐久望月のもろさわようこ（二〇二四年二月二十九日、九十九歳で逝去）門下の作者。意地悪ばあば志願に期待する。

遠山を齎きてよりの銀始 奥山 源丘

「齎く」とは崇める。心の支えに遠山を仰ぐ。春耕しがこれから。宗教としてではなく、自ずからの気持。これが自然との一体感のアニミズムであろう。演出が上手である。へ修羅引きの記憶を負ひて凍つる石」にも注目した。江戸城の石垣の石は伊豆から搬出された。

節分会跳ねて踏み切りつきにけり 堤 保徳

豆撒きの自分なりの動きである。豆撒きそのものよりも、自分がけじめをつけるために跳ねる。これで平常の気持に溜まる「もやもや」に踏み切りをつける。勝手な行動に理由をつけて、自分を元気づけた。さりげない句が面白い。

寒の内グリーンフkeaをまん中に 有手 勉

大事な人の死に出会ったものか。「グリーンフkea」とは悲しみに寄り添うこと。話を聞く、ただ寄り添うだけでも沈んでいる人は救われる。専門の分野が確立しつつあるが、心のkeaは人により対応の仕方はいろいろ。寒中は自然界の厳しい時だけに、気持の変化に対応するにも人手が欲しい時だ。

待春や混み合つてゐる綯の色 黒沢 孝子

だんごむしの家族描きて春を待つ 宮坂やよい

童話掌編を読んだような温かさが手渡される。「だんごむしの家族」が純真な子ども発想だ。子どもはもともと残酷だという見方もあろうが、私は、子どもへの第一印象は素朴に肯定的である。いささか保守的ではないかといわれるが、その上で子どもの残酷さへも関心は深い。初めから無頼派発想は馴染めないところが自分ながら教師的かなと感じている。

初恋は雪のほひのやうなもの 辰野 利彦

穏やかな初恋感だ。純情そのもの。デスベレートではない。ほのかな、いつまでも温めていきたい思い。これが永遠へのあこがれかな。

寒鯛のかまを刮けてより無言 太田 薫

鯛の大きなかまのところを突いて夢中で魚肉を刮げ出す。われながらよくすると感じるほど虜になる。言葉にならないう。卑しいのか、黙めくのか。眠っていた欲がむらむらと起きたものか。「無言」がいい。

軍港に汽笛益るる去年今年 宮沢 久子

横浜港あたりか。初詣ならぬ湊詣で。新年を迎えた途端に一齐に軍艦の汽笛が鳴る。これぞ「みなとよこはま・うとう」。地景色にはっと目覚める。平凡な作ではない。

石牟礼道子忌への思いとは何か―いまなぜ石牟礼か

石牟礼道子忌 鼓灯のまつしぐら 宮岡 光子

石牟礼道子は二〇一八（平成三十）年二月八日、九十歳で

逝去された。「不知火忌」という。世で苦しみ抜いた人の氣持がわかる。これが最高の慈愛であろう。その苦しみ悲しみの救済は地霊へ只管祈るだけではない。公書社会の中核との戦いに自ら身を捧げた生き方によっていた。

例えば船。沖へ航く船には航海灯がある。右舷に緑灯、左灯に紅灯を掲げてひたすら進む。不知火忌を思えばこれだと、氣づいたイメージを認めた迫真の句と思う。同じ作者の〈穴施行月の光の滑ること〉にも心動かされた。

めつけ物雪に転びて見る虚空 米山 節子  
深雪の中で転ぶ。見上げた空の青く美しいこと。これが虚空とは「めつけ物」、方言が冴える。長岡市東谷の雪の深さよ。

今月の秀句

地核への入口のやう炭焼竈 神利 利一  
発想がユニークである。地球の中心を地核という。深さが二九〇〇キロから中心まで。炭焼竈の入口はそこへ探検に入る口のようにだと、面白い。球体の地球に生存していても、地中をどんどん掘って行ったならば、北半球の此処は南半球のある地点に到達するくらいのことは想像しても、専門家でない限りマグマの渦巻く地中まで深くは考えない。想像が炭焼竈からという具体化に思わず微笑んだ。

ね回る日。華やきがあった。茶目つけがあった。ねえねえと近づく空気があった。あの声はいずこ。早世の妻には春の雪が似合う。それにしても、權水尾ちゃんの死は惜しまれた。シヤいな作者の眩き。

男根も 雛も 奉られ 針供養 瀬戸 正男  
春の針供養に「男根」が奉られるとはびっくり。作者の居住地、和歌山の賑やかな習俗か。

一切の終る或る日や軒に干葉 酒井 和子  
これは氣づくことなき氣づきに感銘した。捨てるには惜しい冬菜の残りを吊るして置いた。最後の日、北口の干し竿にからからと葉が鳴って。お別れよと細やかな音。さよなら。

鍼を打つ 頭の百会 朝霞 長島 環  
頭のとっぺんが鍼のツボ。知る人は知るのであるが、どつきり。ああすつきりとは、朝霞と置いた余裕から。

吊し雛亡き兒戯れるやうな 千葉 任子  
雛段に飾られた雛以上に手作りの吊し雛は子を亡くした親の思いを誘う。繰り返すさざなみのように。ここに居るよ。見えると囁いて。他界の子へは日常の感覚の眼鏡を外して心で見ないと見えないことを教えられた句である。

雪田植宿老の振り豊鎌と 山田 一政  
「雪田植」は、秋田の小正月。雪に豆柄や稲藁や麻殻を差し、田植の真似をして感謝する。農具も出し、追肥を撒き、鳥追唄で囃し、豊作を祈る行事。菅江真澄が八郎瀧辺を画い

老いるとは煨から灰の崩ること 倉科 繁登  
よく見つめた老いの句である。比喩がしみじみ胸を打つ。煨が赤くおこっている。静かに表面から赤味が引き出され、灰がこぼれる。老いをこのようにわかりやすく見えるように描いた句は珍しい。挫折ではない、いのちが次第に迫力を失うさまを捉えている。

晩鳥の土の匂ひを抱いて飛ぶ 安藤 潤子  
晩鳥とはむささび。昼間ではない、夕方の土の匂ひを、むささびの真つ黒い肢体の飛翔を通して捉えた。その感性は鋭い。はっと氣づかされた感動がある。

いずれ吾を忘るる母よ風花す 菊池理津子  
今は元氣、私を頼っている。しかし、これから先、さて。雪の花片が舞ってきた。母の自然なさまを思うにつけ、自分がしつかりしたいと思つたのである。

句を学び句を支へとし去年今年 青木百合子  
これは明快。熱心な努力家。俳句は言葉による生きる心棒探し。時に飛躍した遊びを、時に愚痴を、時に眩きを。

焼きたてのパン大年の軽井沢 北沢 雅子  
軽井沢が生き生き。避暑地軽井沢は日常感が薄い。ところが大年は俄然、多忙・金銭・人情・料理などごちゃごちゃ。浅野屋かな、パンの匂いがぶんと。小さな発見がある。

春の雪續紛妻の声いづこ 満田 光生  
ふと亡き妻の声を体感した。牡丹雪が宙を踊子のように跳

た絵図が名高い。秋田の代表的な地貌季語。

風捌くやうな商ひ二月尽 牧野 蘭  
立原道造の詩でも紐解くやうな風仕事詠に惹かれる。さてどんな商ひかな。紙屋かな、手作りのフランス菓子屋かな。短い二月、大丈夫？ 売れ残りはない？

落葉焚き壊れさうなる吾を放つ 田村 道子  
突然の病に倒れ、重ねて見舞われ、氣丈夫な俳詩人もこれはこれだと心配していた。庭での落葉焚きができる。あるいは憧れでもいい。病の雁字搦めな糸から放たれる。これが救い。壊れない壊れない、人間、意外に丈夫。大丈夫。初めて句集が間もなく夫の出版社から上梓される。

機関車は白息を吐く車庫深夜 土屋 敏弘  
一日の仕事が終わり、機関車があああと安息の息を吐くのが寒い深夜とは。俳句は力。九十七歳の働きの者は、今が青春だ。朗詠の声が凜凜。塩尻のベテランである。

他に推薦句をあげる。

春の雪老いて第三反抗期	布山千土里
地に近き暮しや冬の花蔭	久根美和子
半分は脚色したる初日記	山崎 晶市
砂漠や寒夜の釣の電気浮子	柴田 洋子
鷹の夢目覚めてもとの雀かな	小竹 豊子
芽柳は合奏櫛の芽は坐禪	島田 葉月
父に蹤く兄弟の声成木賣	川村 五子